

豊かさを実感できる高齢社会

～二つの“きょうどう”と“信頼”の地域づくり～

東京経済大学 現代法学部 教授 羽貝 正美
(八王子市都市政策研究所 所長)

※ 八王子市都市政策研究所では、2010・2011（平成 22・23）年度に「より豊かな高齢社会を目指して～八王子市の未来を考える～」をテーマに調査研究し、最終報告書を取りまとめた。その最終報告書では「人と人とのつながりが育つまちづくり」を実現させるための視点を提言し、2012（平成 24）年 3 月 27 日にシンポジウム「豊かさを実感できる高齢社会に向けて～八王子市の調査結果にみる“つながり”の大切さ～」を開催した。以下は、その冒頭に行われた基調講演の要旨である。なお、講演の中で直接触れていないスライドについては掲載を省略している。



羽貝 正美 氏

東京経済大学現代法学部教授。専門分野は都市行政・都市政策・地方自治。講演当時、八王子市都市政策研究所運営委員会会長・都市政策アドバイザー。2012（平成 24）年 4 月、同研究所所長に就任。

◆はじめに

皆様こんにちは、ご紹介いただきました羽貝です。パワーポイントで少し大きくした画面を見ていただきながら話を進めたいと思います。おおむね 30 分くらいをめどにしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、このタイトルであります、「豊かさを実感できる高齢社会」ということで、今日ではこのことが本当に大きな課題になっている現実にあります。副題に「二つの“きょうどう”と“信頼”の地域づくり」

と記しましたがけれども、このことについては、話の最後のところでどういう意味なのか、整理したいと思います。

◆高齢社会の現状

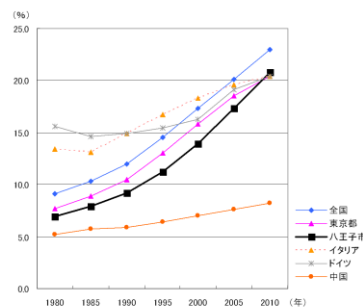
【スライド No.3】 初めに、都市政策研究所による調査研究内容の一番基礎にある事柄についてお話しします。

2つのスライドを先に見ていただきます。今、見ていただいているのは、高齢化率の推移です。一番上に青いラインで全国、その下に幾つか重なっているように見えますけれども、「▲」で東京都、それから「■」で八王子市というふうに日本の状況が示されています。若干外国のことも記してありますが、人口の多い中国というのは、まだまだ相対的に見て若い国なのだということがわかるかと思います。

2011（平成 23）年の初夏に発表されております『高齢社会白書』によりますと、2010（平成 22）年の段階で、日本の高齢化率は 23.1%に達

スライド No.3

高齢化率推移の比較



出所:『より豊かな高齢社会を目指して』最終報告書(p.4)より

しています。本市の現状も国勢調査の結果として、ほぼ21%。この21%という数字は、言葉の定義の中で見ますと「超高齢社会」という社会の状態だということを示しています。

本日のタイトルは「豊かさを実感できる高齢社会」ということですが、実は「高齢社会」の前に「超」という字がつくのです。英語で言えば「Super」ということでしょうか。既に23.1%、5人に1人が65歳以上。「超高齢社会」という現実にあるということです。

補足して申し上げますと、75歳以上の後期高齢者の方々の多さというか、どれくらいの割合かということで見ますと9人に1人という数字になっています。この数字は、この30年ほどで急速に右肩上がりに進展してきています。予測であります、しかしかなり確かな予測ということでお聞きいただければと思いますが、2013（平成25）年には25%台に達し、2055（平成67）年にはさらに高まりそうです。これから43年後ですね。今、20歳前後で就職活動が大変な学生の皆様、この方々が実際に60歳代になって、年金が話題になっているかもしれませんが、およそ43年後には40.5%に達する。そういう推計値です。既に23.1%、5人に1人が高齢者ですが、40数年後には3人に1人、2人に1人という割合で、私たちの身近なところで高齢化が進むというトレンドの中にあるということ、最初に確認したいと思います。

しかし、このグラフには出ていませんが、もう一つのことに注意する必要があります。何かといいますと、要介護認定を受け、介護保険制度を利用してさまざまなサービスを受けておられる方はどれくらいいらっしゃるかということです。現在では16%程度なのです。ということは、84%、8割を超える方々はそれなりにお元気で、地域の中でさまざまな活動をしておられるという、この事実もあるということです。65歳に達し、一般に高齢者と呼ばれる年齢の段階に入ったからといって、みんながみんな、毎日しんどい思いをしながら全く何もできないでいる、そういうことではないということです。

とはいえ、次の現実もまた確かです。このグラフをごらんください。

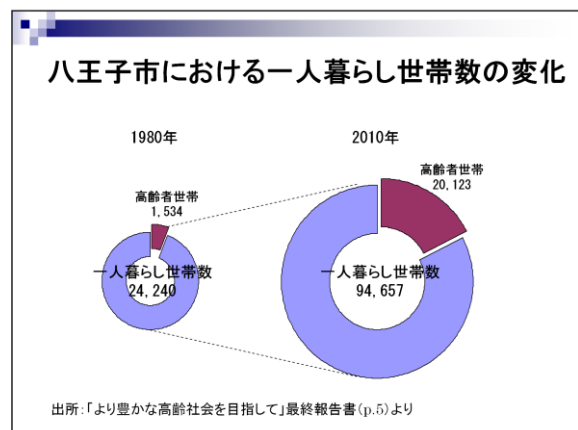
【スライド No.4】 左に小さな円グラフがあり右側に大きな円グラフがあります。ドーナツを一部カットしたような形になっていて、色違いの部分がありますが、ここが大事です。これは、タイトルにあるとおり、八王子市の現状です。一人暮らし世帯数ということで、お一人で暮らしておられる方々がどれくらい増えているかという、絶対数の変化です。左に1980（昭和55）年、およそ30年前の現状が記されています。まだドーナツの大きさは比較的小規模です。2万4,000世帯を少し超える世帯数です。そして右が2010（平成22）年の数字になりますが、9万4,000世帯を超えて、この30年でおおよそ4倍になったことがわかります。

しかしもっと注目していいことは、ドーナツを少しカットしたような部分です。一人暮らし世帯の中でも、高齢で一人暮らしをしておられる、こういう方も多数いるわけです。



八王子市の現状について話す羽貝正美氏

スライドNo. 4



30年前にこうした世帯は1,500世帯ぐらいでした。でも、30年が経過した今では2万世帯を超えています。倍率にして約13倍になります。一人暮らし世帯数が約4倍に増えている中で、一人暮らし高齢者も非常に増えているということが理解できます。

ここからは、先ほど少し触れた「二つの“きょうどう”」ということも絡めてお話ししたいと思います。この2つのグラフから3つのキーワードに注目したいと思います。1つは「超高齢社会」、冒頭にお話しした言葉です。2つ目は「人とのつながり」ということです。3つ目は「地域力」という言葉です。「超高齢社会」、「人とのつながり」、そして「地域力」。この3つのキーワードを今日の話の伏線にしたいと思います。

【スライド No.5】 まず都市政策研究所でどんな調査をしてきたかについて概略を説明します。

研究所では、2010（平成22）年に50歳から84歳まで、男女3,000人の市民の方々を対象にアンケート調査を実施しました。

有効回収率70.0%、これは本当に高い数字なのです。この数字は、八王子市民の、特にこのアンケートに答えていただいた世代の関心とといいますか、問題意識がいかに高いかということ率直に表しています。この会場にいらしている方々の中にも、「あのアンケートは私も書きましたよ」という方もいらっしゃるかもしれません。本当に感謝しています。この高い回収率であればこそ、結果として導き出されたことは、かなり信頼性が高いというふうに私たちは見ています。ここに現れたさまざまな回答結果、あるいは生の言葉で記されている思いの中に真実とといいますか、それぞれが抱えておられるいろいろな悩み、思い、不安が詰まっているのだというふうに改めて感じます。

【スライド No.6】 今一つの調査は、聞き取り調査です。ご協力いただいた方もたくさんおられるかと思います。大規模に開発された団地の町会あるいは自治会を中心に、「地域活動は今のどんな状態でしょうか」ということをお尋ねし、現状についてお話を伺いました。さらには、地縁組織とは違う活動をしていらっしゃる市民活動団体にもお話を伺いました。

このような形で、アンケート調査でデータを集めてそれを分析していくという方法と、実際に生の声で語っていただき、ヒアリングの結果をまとめるという方法。この2つの調査方法で八王子の現状を探ってまいりました。

◆「生きがい意識」と「主観的幸福感」

【スライド No.7】 さて、何ができてきたかということですが、ポイントになることを示したいと思います。膨大なデータを研究所で多角的に分析し考察した結果、「生きがい意識」の重要性に気づかされました。ここにどんな要因が作用しているのかについて、意見を交換し考察を重ねてまいりました。「高齢社会」、「超高齢社会」の中で、その言葉の響きだけで多くの人々

スライドNo. 5

調査の方法① アンケート調査

「八王子市における中高年世代の
生活実態と生活意識に関する調査」

- 調査対象：市内在住50歳以上84歳以下男女個人
3,000人
- 調査方法：郵送配付・郵送回収
- 調査期間：平成22年8月19日～9月2日
- 有効回収率：70.0%

スライドNo. 6

調査の方法② 聞き取り調査

大規模開発団地の町会・自治会を中心に
高齢化の進展を見据えた地域活動の実態調査

- 調査対象：町会・自治会10、市民活動団体2
の長及び活動の中心的人物
- 調査方法：聞き取り調査
- 調査期間：平成23年2月1日～3月9日

が元気をなくしてしまいがちになります。先ほど申し上げましたが、本当に体調も悪く、加齢とともにいろいろなところの調子が悪いという方も、もちろんおられます。しかし一方で、元気に地域で活動してられる方もおられます。高齢化が進むにつれて、「自分はこれでいい。今日できなかったことを、また明日続きをやろう」と、日々次の日の活動が楽しみになるような、その日の活動を肯定し、明日の活動にまた思いをはせながら一日を終えることができることを仮に「生きがい意識」だというふうに表現すると、この意識こそ超高齢社会の中で相当に重要なものではないかと考えているところです。

この生きがい意識にどんなものが作用しているかというのが、スライドの左にある3つの要因です。1つは「人とのつながり」、もう一つは「健康」、最後に「経済的安定」ということであります。これらの3つの要因は、生きがい意識に特に強く関連する順ということで分析から導いたものですが、その特質は少しずつ異なります。

人とのつながりというのは、いわば他者あつての自分。ご近所かもしれませんし、その他いろいろな活動を通してかもしれません。自分以外の他者との関係があつて、成立するものですね。一方、健康や経済的安定というのは基本的に個人的なものです。

生きがい意識というのは、このように、人との関係やつながりも大いにかかわっているし、自分で管理し気をつけなければならない健康も大いにかかわっている。また経済的安定ということもやはりそれなりに重要だということが見えてきています。このあたりを、もう少し詳しく見たいと思います。

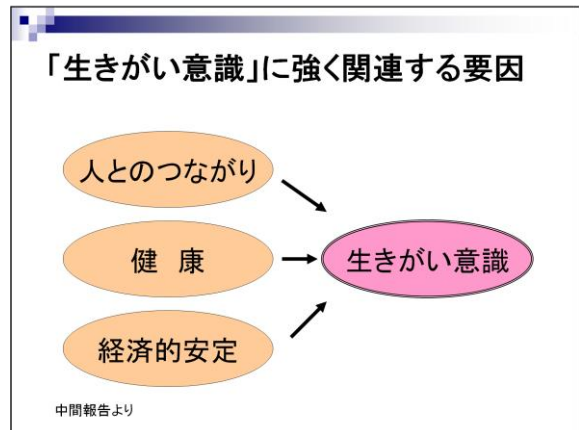
【スライド No.8】 生きがい意識の充実には、具体的にどのような要因が影響しているか、ということですが、スライドの左側に並べてあるものがその主要なものです。

関連が強い順に「趣味や余暇」、「家庭生活」、「他者との交流」、ここにもつながりという部分がありますが、それから「社会参加」、こういうものですね。

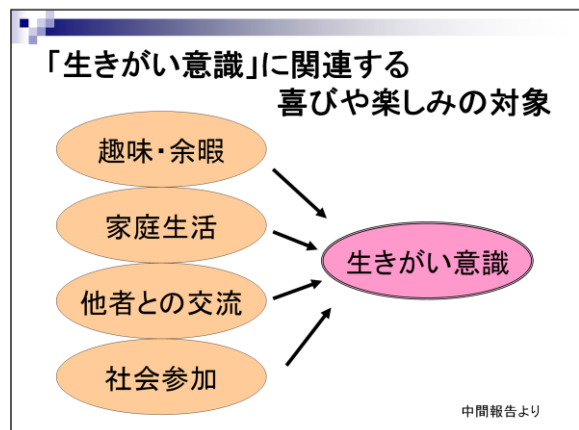
ここにいらっしゃる方々にも、それぞれ自分が日々の生活の中で「これを大事にしている」というものがやはり1つ、2つおありだと思います。改めて強調したいことは、私たちの生きがい意識はかなり複雑で、その意識を高める要因も実に多様だということです。

そして、今一つ強調したいことは、生きがい意識に関連する喜びや楽しみの対象として、「他

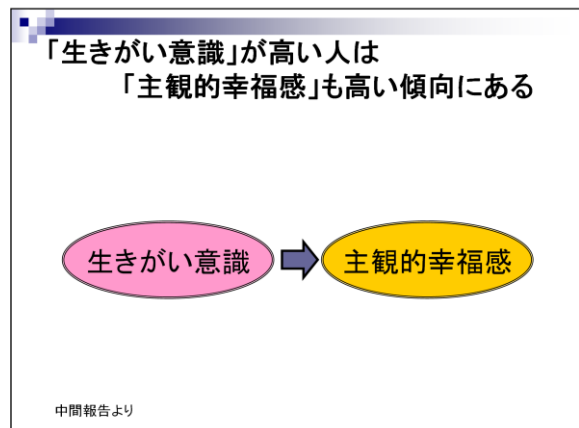
スライドNo. 7



スライドNo. 8



スライドNo. 9



者との交流」、「社会参加」が上位にあったということです。

【スライド No.9】 さて、この生きがい意識は、その人のまさに生きる力となると予想できるわけですが、これに関連するものに「主観的幸福感」という言葉があります。後ほどパネリストの先生からお話があるかもしれませんが、主観的幸福感とは、「自分の生活は日々充実しているな」という気持ちですね。一病息災という言葉もありますが、病院に通院して薬を飲んでいてという事実は確かにあるかもしれません。けれども、毎日生きて暮らしていて、「ああ、これで幸せ」という気持ちになれる、そういう自己肯定感といいますか、自分のまさに生き方、暮らし、日々が納得できるといいますか、そういう気持ちだと思います。生きがい意識が高い人が主観的幸福感も高い傾向にあるということがわかってまいりました。生きがいを持って日々暮らしている人は、毎日が充実しているということがうかがわれます。

さて、ここまでがアンケート調査からわかった主要な部分になります。そのことを前提に、ここからさらに深い分析を試みました。

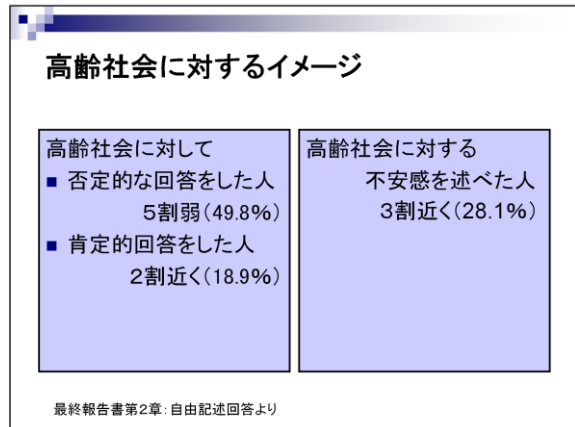
◆「人とのつながり」の重要性

【スライド No.10】 まず、自由記述回答の分析を行いました。少し補足説明が必要かもしれません。さまざまなアンケートにご協力いただくと、最後にお気づきの点や、お思いのこと、お感じのこと、どんなことでもいいですからお書きくださいという問いがあることが多いですね。皆様ご経験があると思います。

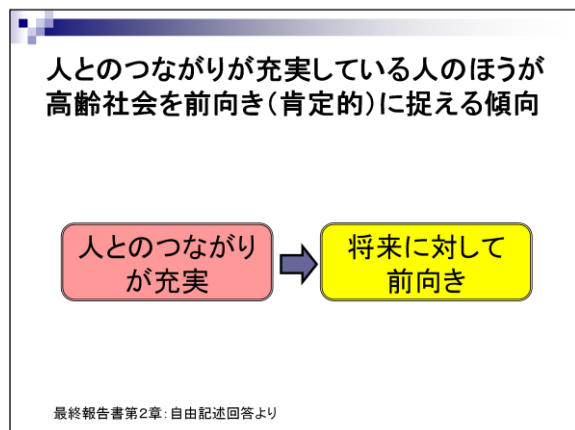
今回も自由記述欄として、「高齢社会をどんなふうにお感じになりますか」という問いを設けさせてもらいました。先ほど 3,000 人のうちの 7 割の方がこのアンケートに答えてくださったとお話ししましたが、その 7 割のうちの 6 割の方がこの自由記述に生の声を記してくださいました。特記すべき割合です。先ほど一言申し上げましたが、本当に切実な問題だというふうに感じていらっしゃる方が多いということです。

この自由記述を詳細に分析した結果について、一部ですが紹介します。「高齢社会に対して、あなたはどのようなイメージをお持ちですか」という問いについて、残念ですが、否定的、消極的な回答がやはり多いのです。スライドの左の四角の中に囲んである内容ですが、50%近い方々が、「どうなるかわからない」、「自分の暮らしの基盤もそのまま維持できるかどうかかわからない」、「健康にも不安がある」、とさまざまに否定的な回答をしておられます。逆に、「大丈夫、まだまだ次の世代もおられる」というさほど否定的でない回答をした方もおられますが 2 割程度でした。また、右の四角にあるように、高齢社会に対して不安感を述べた方も、全体の 3 割近くおられます。

スライド No. 10



スライド No. 11



【スライド No.11】 先ほど少し触れましたが、生きがい意識の高い方が自分自身の日々の暮らし、活動について肯定的にとらえて幸福感も高いということがわかったわけですが、自由記述の回答を分析する中でも、やはり同じことがわかります。人とのつながりが充実している方こそ将来に対して前向きだということです。いろいろと課題や自分にとって不安な材料はあるけれども、しかし自分はだれかとつながっている。親しく話せる話し相手や、相談相手がいるということです。

このように「高齢社会は不安だ」という人が非常に多い半面、人とのつながりが充実している方々の将来への思いは、少し異なるものでした。これに関連する課題が社会的孤立です。

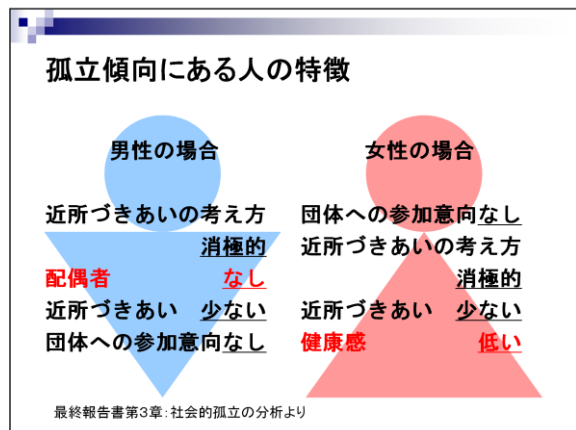
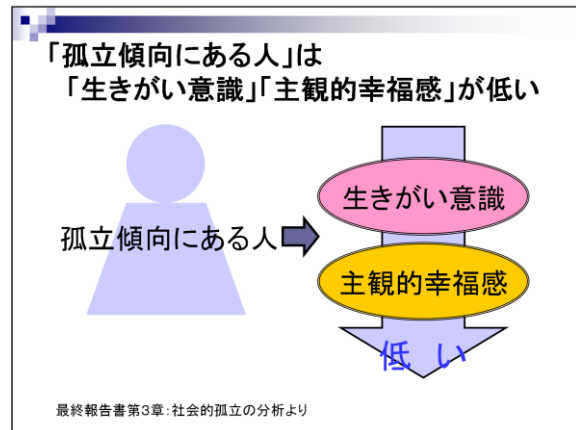
◆社会的孤立の現状

【スライド No.12】 次に分析したのはアンケートから見た社会的孤立の現状です。30 年前に比べ一人暮らしの高齢者世帯が約 13 倍にもなっている現状について、先ほど 2 つの円グラフで確認させてもらいました。この中で今問われているのが「社会的孤立」ということです。「孤立傾向」という言葉には、少し補足が必要かもしれません。日常、頼ったり頼られたりする中には当然ですが、会話があります。日常的にいろいろ尋ねたり直接話し合ったりということもあるでしょう。こういう頼ったり頼られたりという関係にある人が、「一人もいない」または「一人いる」。このゼロか一人という方々を、この調査では「孤立傾向にある人」ということでまとめました。

こういう孤立傾向にある方々は、どちらかという生きがい意識が低い傾向にあります。それから、自分で自分を肯定できる主観的幸福感も低い傾向が見られます。このこともわかりました。なかなか厳しい現実です。日常的なつながりがある人が多数いた方が、違う生き方、違う考え方ができるかもしれないということがうかがわれます。また同時に、社会的孤立は個人の問題ではなく、人々の生きがいや幸福感にも影響する社会問題として取り組む必要があるということを、私たちに投げかけていると思います。

【スライド No.13】 このスライドは、孤立傾向にある人の特徴です。かいつまんだ説明で恐縮ですが、男性と女性との間では少し違います。男性は、近所づきあいに対する考え方が消極的、それから、現実には近所づきあいも少ない。あるいは、団体、町会・自治会等々への参加意向もないという傾向にあります。男性の場合は、断定的には申し上げられませんが、配偶者を通して地域とつながっている、さまざまな人と関係性ができているということがうかがわれるところです。

他方、女性はどうでしょうか。女性の場合で孤立傾向にある方というのは、やはり団体への参加意向があまりない。あまり積極的ではないということです。グループに入って活動したいという、そういうお気持ちが現状では強くない。近所づきあいについてもやはり消極的、実



際におつきあいも少ない。少し特徴があるのは、健康感が低いということです。女性の場合は、ご自身の健康状態ということが非常に気になるのだと思いますし、実際にそのことが人とのつきあいにもマイナスに作用しているということが、うかがわれます。

さて、話を少し展開させたいと思います。次は、高齢化を見据えた地域での活動ということで、先ほど紹介しました高齢社会に対する否定的、消極的な見方や社会的孤立の現実を見ますと、これをどう克服していくかということが問われるわけです。克服するために何ができるかということを考えるときに、そのキーワードが「地域」だと思うのです。私たちの研究所では、地域活動というものが実際にどう展開しているかということに注目して、その現状と当事者の考え方を分析してきました。

◆地域活動への参加の現状

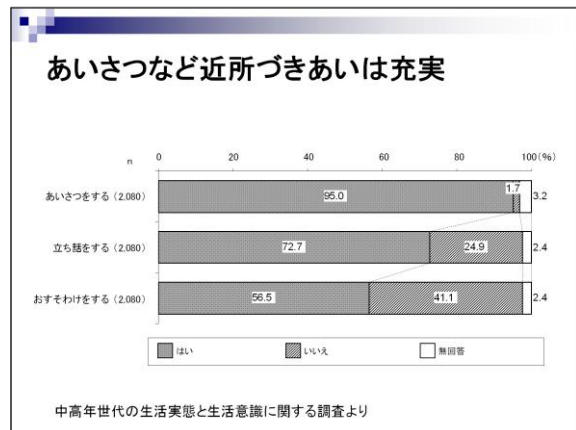
【スライド No.14】 このグラフは、市民の近所づきあいを表したものです。非常に明瞭ですが、日常生活の中で多くの市民が互いにあいさつをしています。95%の方があいさつしますよというのは、非常に高い数字ですね。立ち話もしますよという方は70%を超えています。何かたくさんおいしいものをつくったらおすそ分けもしますというご近所づきあいがある方も、5割を超えています。これはなかなかの関係ですね。非常にすばらしいことだと思います。

【スライド No.15】 しかし、その反面、次のような現実もあります。ここでの団体には、町会・自治会、マンションにお住まいの方は管理組合などが入ります。その他、趣味、健康に関する自主的な団体活動。グループ活動、それからボランティア等々も含まれます。カテゴリーによって割合は多少違いますが、近所づきあいについての高い割合に比べると、団体やグループへの参加の現状は、低いと言わざるを得ない現実があります。4割の方、45%の方が町会等にかかわっておられるという現実はもちろん軽視することはできませんし、これはなかなか頑張っておられるなど見ることはできます。

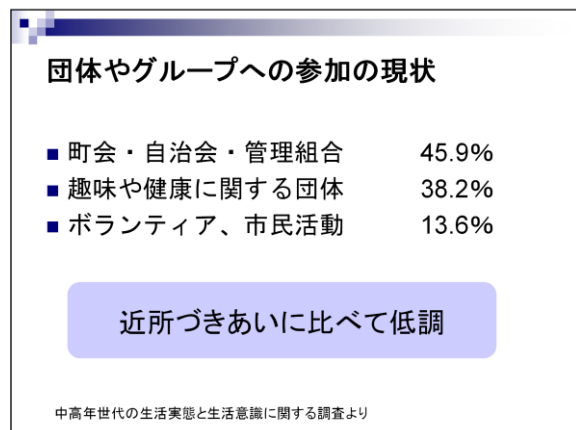
近所づきあいに対して肯定的な方が多い反面、団体への参加割合は低く、しかも、全般的に地域、町会・自治会、さらにボランティア、市民活動となりますと、市民の参加状況はどうしても低調にならざるを得ないという現実があります。

【スライド No.16】 しかし、そういう中でどんな希望を持っておられるかというのがここに書いてあります。いろいろあるのです。サークル活動等、団体で何かをやりたいなと思う方

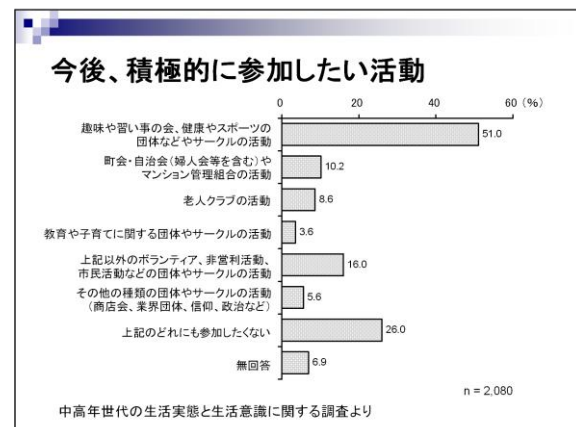
スライドNo. 14



スライドNo. 15



スライドNo. 16



が少なからずおられます。一番上の棒グラフで、趣味、習い事等にかかわりたいと思っておられる方も50%を超えています。しかし、老人クラブ、教育、子育て等いろいろな活動のどれにも参加したくないというふうに回答しておられる方も26%います。「どれにも入りたくない」という回答の存在を、私たちはちゃんと正面から見なければならぬだろうと思います。

【スライド No.17】 研究所では、既に高齢化を見据えて活動を展開している団体に聞き取り調査を行いました。各団体の活動の詳細は後ほどのパネルディスカッションのパネラーの方々に譲り、ここでは全体のまとめだけを話しますと、個人を支える地域活動への期待が高まる一方で、そうした高齢化を見据えて活動を展開している団体では、活動の担い手や場所、資金といった問題を有していることが明らかになりました。

◆豊かな高齢社会を目指すための3つの視点

【スライド No.18】 さて、研究所では提言をまとめ、先般、黒須隆一市長（当時）にお渡ししたところです。タイトルは「生きがいをもって暮らせる高齢社会を目指して」ということで、「人と人とのつながりが育つまちづくり」というキーワードを入れました。このスライドは提言の概念図ですけれども、特に地域の皆様あるいは住民の皆様に頭の片隅に残していただきたいのは、左側の囲みです。

高齢社会という現状を踏まえ、個人、地域社会、行政もそうなのですが、それぞれにとって問われていること、求められていることがある。その視点を整理したところです。順次、簡単にお話ししますが、小さなきっかけを大事にしようとか、社会的孤立ということを解消、予防をするような環境づくりも必要ですとか、いろいろな世代が交流できるようにしようということです。右側の囲みの部分は、今日は割愛させていただきますが、行政の役割をまとめたものです。行政にもこういう現状や課題をしっかりと受けとめて

スライドNo. 17

地域活動への期待と課題

- 高齢化を見据えた活動をする団体(町会・自治会)もある
- 地域社会の中で個人を支える団体への期待が高まる

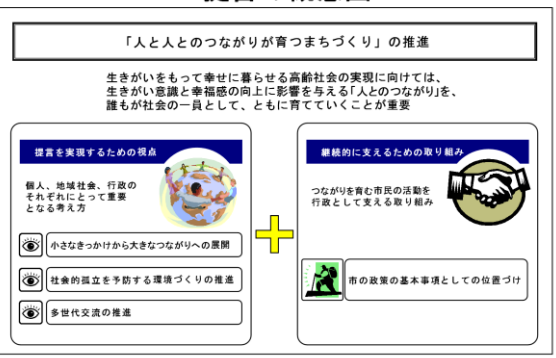
しかし一方で

- 多くの団体では・・・
活動の担い手や場所、資金、個人情報把握の困難さといった問題を有している

最終報告書第4章：地域活動より

スライドNo. 18

提言の概念図



スライドNo. 19

視点1「小さなきっかけから大きなつながり」

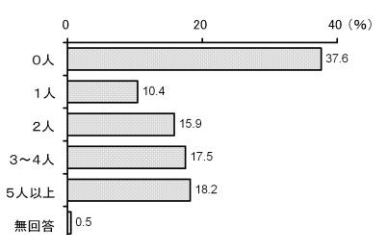
- (1) 興味から結ばれる縁“関心縁”の奨励
- (2) 多様な社会的役割に取組める環境整備
- (3) 社会関係を保つ礎である健康の重要性
- (4) 地域の団体が連携し合う重要性

最終報告書第5章：提言より

スライドNo. 20

視点1「小さなきっかけから大きなつながり」

頼りにし、親しくしている近所の方の人数



n = 2,080

最終報告書第5章：提言より

いただくという話であります。

【スライド No.19】 ポイントだけお話しします。まずは視点1の「小さなきっかけから大きなつながり」です。4つほど書いてありますが、例えば(1)の「関心縁」ですね。興味を大事にしようということです。だから趣味の活動はとても大事ですね。それから(3)健康ということが先ほど、特に女性の皆様にはかなり意識されているということもお話ししましたが、何か小さなきっかけ、小さな活動が大きな人とのつながりの輪をつくる、そういうことにつながっていく可能性が非常に高いということでもあります。

【スライド No.20】 これもなかなか衝撃的な結果です。日ごろ絶えず親しくしている近所の方の数、実はやはりアンケート調査からいいますと、ゼロという方が結構おられるのです。こういう現実があるので、なおのこと、小さなきっかけを大事にしようということになるわけです。

【スライド No.21】 写真をご覧ください。これは「めじろむつみクラブ」というところと、「片倉台福祉ネットワーク」の皆様の写真ですが、自分の仕事を通して、培ってこられた経験をいろいろなところに役立てようということで、まさに小さなきっかけですね。小さなきっかけを大事にして活動しておられる皆様の紹介です。非常に大きいポイントだと思います。

【スライド No.22】 視点の2つ目、社会的孤立を予防しようという取り組みです。その意義はやはり何といっても次の点に凝縮されるように思います。お互いに顔を合わせよう、顔の見える関係づくりをしようということです。顔を合わせて、お茶を一緒に飲もう、あるいはご飯を食べようではないか。このことが、やはり大事なのだということがわかります。

【スライド No.23】 それをまさに証明するような写真がここにあります。

左上の写真は、横川町住宅の「わいわいサロン」の写真ですが、にこやかに本当に楽しそうに食事をしていらっしゃる、あるいはお茶を飲んでいらっしゃる姿が出ています。その下の方

スライドNo. 21

視点1「小さなきっかけから大きなつながり」



家庭や地域など、さまざまな場で高齢者が社会的役割に取り組める環境整備が大切
【上】めじろむつみクラブ(MMC)
【右】片倉台福祉ネットワーク
最終報告書第5章:提言より



スライドNo. 22

視点2「社会的孤立を予防する環境づくり」

- (1) 顔の見える関係づくりに取り組む
- (2) 外出しやすい環境づくりを進める
- (3) 公民の連携により孤立予防を図る

最終報告書第5章:提言より

スライドNo. 23

視点2「社会的孤立を予防する環境づくり」



最終報告書第5章:提言より

- 地域住民が集う場
【左上】横川町住宅自治会
「わいわいサロン」
【左下】きよびー&とまと(清川町)
○対応策を検討するネットワーク
【下】孤立・孤独死防止を考える会
(館ヶ丘自治会)



スライドNo. 24

視点3「多世代交流の推進」

- (1) 多世代で地域社会を支え合う
- (2) 働くことで社会とつながる
- (3) 地縁団体活動参加への門戸を広くする

最終報告書第5章:提言より

は、「きよぴー&とまと」というグループの活動ですが、ここでもまさに食事をつくったり、お惣菜をつくったり、配食したりという活動を地域で展開しておられます。右下は、館ヶ丘自治会が孤立や孤独死を防止しようということで、地域で活動するさまざまな団体に声をかけ、情報や思いを持ち寄って真剣に話しておられる場面です。

【スライド No.24】 視点の3番目は、多世代交流の推進ということ。社会というものは、さまざまな世代があって、はじめて成り立ちます。このことは地域社会でも同じだと思います。

【スライド No.25】 右の写真を先にご覧ください。平成24年3月1日号の「広報はちおうじ」にも掲載していただきましたが、通学時の安全を確保するということで、地域の方が子どもたちと一緒に学校に向かう、その様子を紹介した写真です。地域の子どもの安全を地域の高齢者が担っているわけです。こうした社会参加を通じた世代交流はこれから重要だと思います。また、左の写真は、「岩手県立大学ボランティアセンター」の取り組みですが、学生が、地域のニーズを聞きに町会の会館に出ていき、地元で食材を調達して地元の方々と鍋を囲む取り組みです。

【スライド No.26】 最後の1枚は、行政への提言です。先ほど、つながりを作るきっかけとして大切な視点を3つ挙げましたが、それを継続的に支える行政のしくみも必要なのです。このことを大事にいただき、多角的に考えてもらおうという提言です。

◆おわりに

最後に、「二つのきょうどう」ということについて触れたいと思います。これまで見ていただいた活動は、だれかに言われて、だれかに強いられてやっている活動では全くありません。そこがポイントなのですね。だれかに促されて、やりなさいと言われてやるわけではない。各人が自然発生的に何かアイディアといいますか思いを持ち寄って、今の形ができています。役所の補助等々、活動に必要な公的サポートも大切ですが、それがなくてもやれることはやろうではないか。これが「共同」ということです。「二つのきょうどう」のうちの1つです。共同社会の共同。皆様になじみのある表現かと思います。

今一つ、例えば学校の安全ボランティアですね、学校現場、教育委員会等とも今後さらに連携を強めることになるかと思います。この例で言いますと、まさに行政の皆さんとよく話し合いながらやっていきましょう。子どもたちの安全を確保しましょう。それに私たちも一肌脱ぎたいと思っている。そうした協力連携の関係です。これに今一つの「協働」という漢字を当てるのです。片仮名ではパートナーシップと一般に言われているものです。

平仮名では同じ「きょうどう」になりますが、「二つのきょうどう」という世界があって、お

視点3「多世代交流の推進」

多世代交流と社会的役割を担う
【右】学校安全ボランティア
(松子舞団地自治会)
【下】土鍋ねっと(Do Nabe Net)
岩手県立大学ボランティアセンター



最終報告書第5章：提言より

継続的に支えるための取り組み

- 市の施策の基本事項としての位置づけ
- (1) 総合計画上に明確に位置づけ、
継続的に取り組む
 - (2) 複数の社会的課題を解消する
複合的な事業実施を図る
 - (3) 人と人とのつながりが生まれ育つような
事業展開を図る

最終報告書第5章：提言より

互いに補完し合っている関係にあると理解しています。地域のだれにも言われずとも、自発的にやろうではないかという思いから始めた人々の活動が、例えばこういうふうに行行政の皆さんとも一緒にやろうではないかという活動に展開していく、あるいは公共を支える主体になるということですね。

「安全・安心のまちづくり」という言葉を、どなたもどこかで耳にしたことがあると思います。まちが物理的に安全だから気持ちのうえでも安心だということかもしれませんが、一般に安全・安心というふうに2つをつなげて紹介されると思います。

しかし、安全・安心であるとともに、もう一つ、これからの超高齢社会の中で大事なことがあると思うのです。それが「信頼」ということなのです。地域として安全だ、地域の人間関係として安心だということは、まさにどのような事態、どのようなことが起っても、私たちは地域の中に自分が安心できる、つまり信頼できる人間関係を築いているということです。そして、そうした信頼のまちづくりが非常に重要になっていくだろうと思います。

超高齢社会ということですが、今回のアンケート調査並びに分析は、人とのつながりが生きがい意識を育み、その生きがい意識がネットワークとなって、つながって地域の力となっているということを、私たちに教えてくれているのではないかと思います。この後にパネルディスカッションがありますが、各々の分野で活動しておられる方々の話を伺い、さらにこの辺の理解を深めたいと思っています。私の話はひとまずこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（場内より拍手）

（はがい まさみ）

調査研究の詳細については、2010・2011（平成22・23）年度研究の最終報告書『より豊かな高齢社会を目指して～八王子の未来を考える～』を、シンポジウムの詳細については、報告書『シンポジウム 豊かさを実感できる高齢社会に向けて～八王子市の調査結果にみる「つながり」の大切さ～』（いずれも八王子市都市政策研究所）をご覧ください。

上記の報告書は、市内図書館、市政資料室およびホームページでご覧いただけます。